

# 19 大仏殿

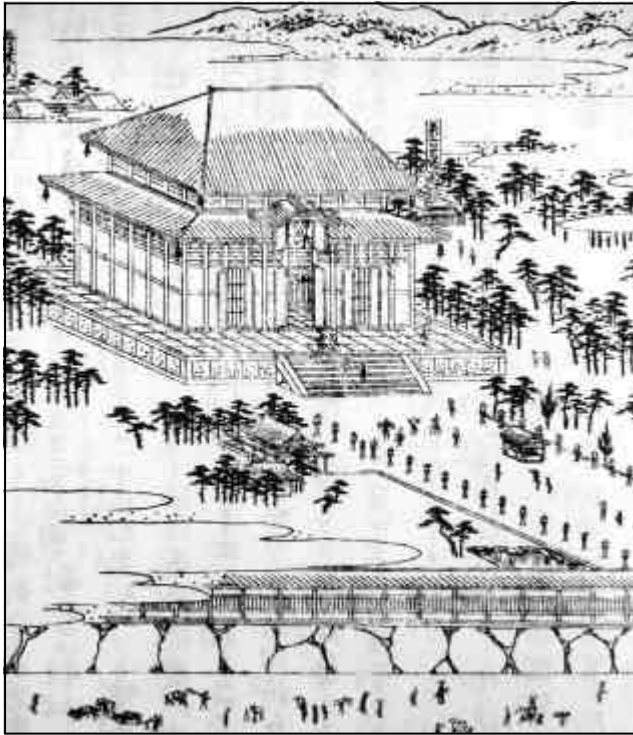
だいぶつでん

## 知る

大仏殿とは？

天正十四（一五八六）年、豊臣秀吉は奈良の大仏に匹敵する大仏を京都東山山麓に建立することを計画、高さ六丈三尺（約十九メートル）の木製金漆塗坐像大仏を造営しました。

大仏が安置された大仏殿は二重瓦、高さ二十五間（約四十



『都名所図会』に描かれた江戸時代の大仏殿。大仏の顔が見えている。手前には巨大な石塁があり、今でも京都国立博物館の西側で見ることができる。

九メートル）、桁行四十五間二尺七寸（約八十八メートル）、梁行約二十七間六尺三寸（約五十四メートル）という壮大なもので、文禄四（一五九五）年頃に完成しました。

大仏殿は西向きに建てられ、境内は、現在の方広寺・豊国神社・京都国立博物館の三か所を含む広大なもので、各種の洛中洛外図屏風に描かれています。現存する石垣から南北約二百六十メートル、東西二百十メートルの規模であったと推定されています。

慶長元（一五九六）年閏七月に起きた慶長大地震により開眼供養前の大仏と築地が倒壊しました。慶長二（一五九七）年、秀吉は信濃国善光寺の阿弥陀如来を安置しましたが、翌年八月秀吉の容態悪化によって善光寺へ阿弥陀如来を返還、同月十八日秀吉が死去、秀吉の死は外部に伏されたまま、慶長三（一五九八）年八月二十二日大仏のない大仏殿で開眼供養が行われました。

その後、秀吉の遺志を継いだ秀頼が大仏の再建に着手しましたが、慶長七（一六〇二）年鑄造中の大仏から出火炎上しました。慶長十三（一六〇八）年秀頼は再度大仏再建を企図し、慶長十七（一六一二）年に完成。しかし、寛文二（一六六二）年の地震で再び小破し、寛文七（一六六七）年に造り直されました。

寛政十（一七九八）年七月一日夜、大仏殿に落雷し、本堂

・楼門を焼失、木像の大仏も灰燼に帰しました。その火災は「京の大仏つあんは、天火で焼けてな、三十三間堂が焼け残った、アラ どんどんどん、コラ どんどんどん、うしろの正面どなた」とわらべ歌にうたわれました。

天保年間（一八三〇～四四）尾張国の有志が半身の大仏像を造り、仮殿に安置しましたが、昭和四十八（一九七三）年三月二十八日深夜の出火により半身の大仏と大仏殿は焼失してしまいました。

### 大仏殿と豊臣家

秀頼の大仏再建では大仏はほとんど完成しましたが、慶長十九（一六一四）年、家康が突如開眼供養の延期を命じました。これが世にいう「鐘銘事件」の発端です。

鐘銘事件とは、豊臣秀頼が大仏再建の際に鑄造した釣鐘の銘のうち「国家安康」の部分が、家康の胸を切るものだとして家康が難癖をつけ、これをきっかけに大坂の陣が開戦した



左が右に塗られて、左側の部分の鐘の鐘の寺の方広に「国家安康」の文字は「豊臣君」

に指定されています。

### 大仏殿の遺構

大仏殿跡の発掘調査は平成九（一九九七）年京都国立博物館新館周辺、平成十一（一九九九）年豊国神社の東隣で行われました。

京都国立博物館では、大仏殿西端から東端までの石垣・南門・回廊・石組溝・鑄造遺構などが検出されました。石垣に沿って排水溝があり底に灰の混ざった土が堆積していました。また南門の基礎跡の配置から、大仏殿南門は、門扉の付いた中央柱列の前後それぞれ四本の柱をもった八足門と判明しました。

豊国神社の調査地は大仏殿基壇にあたり、基壇の南端を示す地覆石や南中央にあつた階段跡が検出されました。

基壇の方形の高まりは約一・八メートルで、基壇上面に化粧石が検出されました。化粧石がない部分は柱があつた場所で、大仏殿の建物を支えるため直径四メートルの大きな穴が掘られ、石を詰める基礎工事が行われていました。

大仏台座は文献によると直径十八間（約三十四メートル）の八角形とされています。今回の発掘で台座南端にあたる部分が検出されました。

## 歩く／見る

方広寺 東山区正面通大和大路東入

天台宗。大仏殿を管理する寺として豊臣秀吉によって創建されました。

現在は鐘楼と鐘銘事件の原因となった鐘（重要文化財）が

残り、本堂には大仏眉間仏や十分の一に縮小した大仏（阿弥陀如来像）が安置されています。

豊国神社 東山区正面通本町

豊臣秀吉を祀る。俗にホウコクさん。慶長三（一五九八）年、秀吉の遺体が東山の阿弥陀ヶ峰山頂に葬られ、翌年、社殿が山麓に創建されました。秀吉七回忌では盛大な臨時祭礼が行われ、その様子は「豊国臨時祭礼図屏風」に描かれています。

豊臣家滅亡後、徳川幕府は社号を廃し、社殿は朽ちるに任され、その跡は太閤坦と呼ばれる広場になっています。

明治十三（一八八〇）年に旧大仏殿境内に社地を移し、社殿が造営されました。唐門（国宝）は南禅寺金地院から移され、伏見城の遺構だと伝えます。

妙法院 東山区妙法院前側町

天台宗。南叡山と号し、本尊は普賢菩薩。

永暦元（一一六〇）年後白河法皇の新熊野社勧請にともない、延暦寺西塔本覚院の昌雲が法住寺御所内の蓮華王院（三十三間堂）鎮守新日吉社の検校となり、妙法院と号し里坊を開いたのに始まります。鎌倉時代初期に祇園社西に移り綾小路房と呼ばれ、高倉天皇皇子尊性法親王の入寺以来、梶井門跡（三千院）、青蓮院門跡と並ぶ門跡寺院としての地位を得ました。

天正十四（一五八六）年ころ現在地に移り、豊臣家滅亡後、蓮華王院（三十三間堂）、新日吉社、後白河法皇御影堂、大

仏殿が妙法院の管理下に置かれました。

京都国立博物館 東山区茶屋町

明治三十（一八九七）年、古社寺の文化財の破損や滅亡を防ぎ、保存・収集することを目的に帝国京都博物館として開館しました。明治三十三年に京都帝室博物館と改称。大正十三（一九二四）年京都市に下賜され、恩賜京都博物館と称されましたが、昭和二十七（一九五二）年国に移管し京都国立博物館となりました。

この地は明治三（一八七〇）年明治政府によって公収され、恭明宮にあてられ、その跡地が博物館となりました。

恭明宮は、明治維新後の神仏分離によってそれまで御所黒戸に安置されていた仏像と歴代天皇の位牌を祀る場所として創設。東京遷都に際し天皇に随行しなかつた宮中の女官のための居住施設を兼ねた建物でした。明治九（一八七六）年に廃止され、霊牌殿は泉涌寺に、仏像仏具は水薬師寺（下京区西七条石井町）に移され、残った建物は皇室ゆかりの寺院に移されました。

現在、博物館西と南の一部に大仏殿敷地の石塁が残されており（国指定史跡）、博物館構内北部の一部が大仏殿の場所に相当、平成九（一九九七）年の発掘調査では、大仏殿の遺構として石垣や柱穴列、南門と回廊の基礎跡、大仏瓦、石組溝、鑄造遺構、南面石垣などが見つかっています。

三十三間堂 東山区三十三間堂廻り町

正しくは蓮華王院。本尊は千手観音。長寛二（一一六四）

年、後白河天皇の勅願で創建。名称は堂の内陣柱間が三十三あることに由来します。三十三間堂は蓮華王院の本堂で、千一体の観音菩薩像が安置された国宝建築です。

天正十四（一五八六）年豊臣秀吉の大仏殿創建により方広寺の山内寺院（千手堂）となりました。秀吉没後、方広寺が妙法院の管理下に入ったことから、蓮華王院も妙法院に属し、現在に至っています。

方広寺の土塀の一部が三十三間堂の築地塀「太閤塀」として残っており、重要文化財です。



大仏殿跡緑地公園 東山区茶屋町

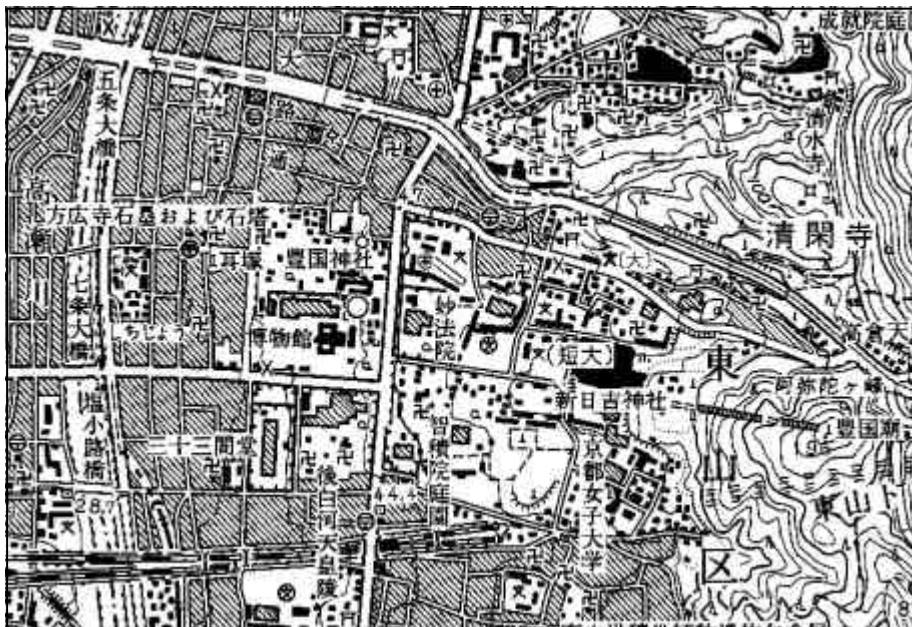
この地は豊国神社の東隣にあたります。発掘調査によって大仏殿の基壇に相当していたことがわかり、大仏殿跡の台座などが見つかりました。

大仏殿跡の遺構は地下に保存され、調査地点は緑地公園となっています。

耳塚 東山区大和大路通正面西入

豊国神社の西に小高い墳丘が作られ、その頂に五輪塔が立っています。これが耳塚で、国指定史跡「方広寺石塁および石塔」に含まれ「石塔」のひとつです。もうひとつは豊国神社境内に立つ馬塚。

豊臣秀吉の朝鮮出兵（文禄慶長の役）で、配下の武将が朝鮮軍民の鼻や耳を切り取り、戦利品として日本に持ち帰りました。耳塚は慶長二（一五九七）年、これを埋めて供養した塚



大仏殿跡附近の現況。中心からやや左寄りに豊国神社があり、ここに大仏殿が立っていた。右端の山上には秀吉の墓である豊国廟が見える。

\* 国土地理院長の承認を得て、同院発行の数値地図25000（地図画像）を複製。承認番号 平14総複第494号

です。当初は鼻塚と呼んでいましたが、次第に耳塚の名で知られるようになりました。大仏殿や豊国神社や豊国廟とあわせて、東山における秀吉の遺跡のひとつです。